**佐々木　繁 （ささき　しげる）**

**１、プロフィール**

詩人・随筆家。昭和２年詩誌「鴉」・昭和３年詩誌「唄」を編集発行し、詩人としては、静謐な抒情的象徴詩を書き、新進詩人と評価された。戦後は随筆集を刊行し、活動した。

＜生没＞

1909（明治42）年３月３日 ～ 1993（平成５）年11月１日

＜代表作＞

詩誌「鴉」

随筆集『菓子屋ラグノオ』

＜青森との関わり＞

弘前市に生まれる。家業（菓子屋）に従事する傍ら、詩および随筆の分野において、創作活動をした。

**２、作家解説**

詩人・随筆家。明治42年弘前市百石町に生まれる。大正４年、時敏尋常小学校に入学。在学中、「みづゑ」に応募した水彩画が入選、画才が期待された。10年４月、県立弘前中学校に入学。12年、関東大震災で弘前に帰郷した福士幸次郎が、しばらく繁の家に寄寓、それが縁で、文学に目覚め、創作を始める。一戸玲太郎（謙三）との交遊もこの頃から始まった。13、14年「弘前新聞」募集の福士幸次郎選の「詩」に応募し、入選する。筆名は笹木滋。14年秋、弘中短歌会ができ、弘前中学校教師穴沢赳夫が指導、繁の家で月例会が持たれた。15年３月、弘前中学校卒業、家業の菓子屋に従事し、その傍ら詩作を続ける。昭和２年４月、北原白秋主宰の「近代風景」の「詩」の部で推薦作品に選ばれる。６月編集・発行人として詩誌「鴉」を創刊する。本県の詩人たちにセンセ－ションを巻き起こした。広く県外県内の詩人から原稿を集め、主な執筆者は、佐々木繁・一戸玲太郎・福士幸次郎・斎藤吉彦・八木隆一郎・棟方寅雄らである。第５号掲載の宮越武助が翻訳したカルコの詩の１篇「愛」が風俗壊乱ということで発禁となり、これを契機に終刊となる。昭和３年11月詩誌「唄」を創刊。２号で終刊。詩人としては、青春の懊悩・孤独を静謐な抒情に還元した象徴詩を書き、新進詩人と評価された。この頃、福士幸次郎に「詩を作るよりよき市民となれ」と諭され、詩作を断った。昭和28年６月、随筆集『菓子屋ラグノオ』（りら・そさえて刊）を刊行。31年、一戸謙三・高木恭造らと不串会を結成、７月弘前公園に福士幸次郎詩碑を建立する。53年１月、随筆集『いらぬ左平次』（北の街社刊）、54年12月随筆集『下手の覚え』（北の街社刊）、62年６月、随筆集『老の手枕』（北の街社刊）を刊行、精力的に執筆活動を行い、生活者の心境を描いた。平成２年10月、合冊復刻版『鴉』（北の街社刊）を刊行。平成５年11月１日、弘前市において、81歳で死去。

**３、資料紹介**

〇「鴉」（合冊復刻版）

図書

1990（平成２）年10月30日

135mm×195mm

詩誌「鴉」・「唄」合冊復刻版。平成２年10月30日発行。北の街社刊。内容は「鴉」・「唄」掲載作品を作家別に編集収録、小野正文の「あとがき」がある。アンソロジ－の体裁をとり、二誌の全貌をも概観できる。